



Title	芥川作品の中の＜鏡花＞：『奇怪な再会』を中心として
Author(s)	西尾, 元伸
Citation	阪大近代文学研究. 2006, 4, p. 33-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92637
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

芥川作品の中の〈鏡花〉

——『奇怪な再会』を中心として——

西尾 元伸

はじめに

芥川龍之介『奇怪な再会』は、大正十年一月五日から二月二日まで「大阪毎日新聞」夕刊に連載された。この作品は、吉田精一が、「これは題材から云つて、鷗外の「風坂」と鏡花の「三尺角」とを思わせる。或はこの二編からの暗示を認めると断言してもよいかも知れない。」⁽¹⁾と評したのをはじめとし、鏡花作品の影響下にあることを指摘されている。そして、これは鏡花研究という立場からは周知のこととして扱われている⁽²⁾。

ところが芥川研究の立場から『奇怪な再会』を取り上げた場合、様相はやや異なる。鏡花の影響よりもむしろ、「勿論だれでも直ちに気付くように、この「東京中が森になる」云々は、シェークスピアの「マクベス」の主要なモチーフからの借用／剽窃である」⁽³⁾と論じられていたり、『芥川龍之介全集』第七巻（平成八年五月、岩波書店）の注解に先述の吉

田精一の論が引かれていることを挙げながら、「再評価あるいは再検討の必要に迫られる機会を与えられなかった作品であると言いつ得るのではないだろうか」⁽⁴⁾という論考が提出されたりしている。『奇怪な再会』の評価の中では、鏡花の影響とは別の視点の方が、重要視される傾向にあるようである。しかし、『奇怪な再会』における、鏡花から芥川への影響は詳細に検討されてきたとは言い難い。影響関係の指摘は、それが肯定的なものであれ、批判的なものであれ、予言めいた言葉の現実化にあると受けとめられている。

●「滄桑の変と云ふ事もある。この東京が森や林にでもなつたら、御遇ひになれぬ事もありますまい。——とまづ、卦にはな、卦にはちゃんと出てゐます。」（『奇怪な再会』四）

●そこで牧野は相手の後へ、忍び足にそつと近よつて見た。するとお蓮は嬉しさうに、何度もかう云ふ独り語を呟いてゐたと云ふぢやないか？——『森になつたんだねえ。』

とうとう東京も森になったんだねえ。』……………

…(同、十六)

『奇怪な再会』においては、辻占の予言の通り、お蓮に東京が森になった光景が見える。そして、『三尺角』(明治三十二年一月)においても、手紙に書いてあった通りの材木に枝葉がさかえる光景を、与吉が目の当たりにする。

●「ねえ、ねえ、お聞きよ、あれ、柳ちゃん——柳ちゃん——しっかりと。お手紙にも、そこらの材木に枝葉がさかえるやうなことがあつたら、夫婦に成つて違つて書いてあるぢやあないか。『三尺角』(十)

●「大変だ、大変だ、材木が化けたんだぜ、小屋の材木に葉が茂つた、大変だ、枝が出来た。」

と普請小屋、材木納屋の前で叫び足らず、与吉は狂気の如く大声で、此家の前をも呼はつて歩行したのである。

「ね、ね、柳ちゃん——柳ちゃん——」

うつとりと、目を開いて、ハヤ色の褪せた唇に微笑むで顔いた。人に血を吸はれたあはれな者の、将に死なんとする耳に、与吉は福音を伝へたのである、この与吉のやうなものでなければ、実際また怒る福音は伝へられなかつたのであらう。(同、十)

先述の通り、『奇怪な再会』にはシェークスピアの影響が指摘されている。作品の成立に影響を与えるものは一つとは限らない。むしろ、作品が多方面からの影響の下に成立する

こともあると考えられるだろう。但し、このように比較するならば、確かに二つの作品は、吉田精一が述べていたように同じような趣向を持っている作品とは言えそうである。

そこで、まずはこれまでに指摘されてきた、鏡花『三尺角』の芥川『奇怪な再会』への影響について再検討することからはじめたい。芥川作品において、〈鏡花〉は一作品『奇怪な再会』だけに關わるものではないからである。本論は他作品における〈鏡花〉の影にも視野を広げ、芥川の鏡花受容のみならず、芥川の〈鏡花〉への距離までを考察の対象とする。

一、春陽堂『鏡花集』からの撮取

——『奇怪な再会』と『妙な話』

では、『奇怪な再会』にみられる『三尺角』との共通点は、東京が森になる予言の実現という一点のみだろうか。仮にそうだとすれば、着想を得たに過ぎない、作品の読解には深く關わらない問題であるかもしれない。しかし、私見によれば、『奇怪な再会』と『三尺角』の場合には、それに留まらない。両作品には、「再会」という主要なモチーフまでが共通しているように思われる。

鏡花『三尺角』には、その続編である『三尺角拾遺』(明治三十四年六月)がある。芥川『奇怪な再会』の成立を考える際には、この『三尺角拾遺』も視野に入れるべきだと思わ

れる。『三尺角拾遺』には、『三尺角』には描かれなかった、お柳と工学士の「再会」の場面が描かれているからである。それでは、『奇怪な再会』と『三尺角拾遺』、双方の「再会」の場面を比較してみる。まず『奇怪な再会』を引用する。

● —すべてが金に違ひなかつた。のみならず彼はお蓮を見ると、やはり煙管を啣へた儘、昔の通り涼しい眼に、ちらりと微笑を浮べたではないか？

「御覧。東京はもうあの通り、何処を見ても森ばかりだよ。」

成程二階の垂宇欄の外には、見慣ない樹木が枝を張つた上に、刺繍の模様にありさうな鳥が、何羽も気軽さうに轉つてゐる、——そんな気色を眺めながら、お蓮は懐しい金の側に、一夜中恍惚と坐つてゐた。……………(十七)

次は『三尺角拾遺』の引用である。

● お柳は暗夜の中に悄然と立つて、池に臨むで、其の肩を並べたのである。工学士は、井桁に組んだ材木の下なる端へ、窮屈に腰を懸けたが、口元に近々と吸つた巻煙草が燃えて、其若々しい横顔と帽子の鰐広な裏とを照らした。〔『三尺角拾遺』〕

● 「何ともありませんか、又ぶり返すと不可ませんわ、金さん。」

其でも、ものをいはなかつた。(同)

● 「あれ、情が強いねえ、さあ、えゝ、ま、瘦せてる癖に。」と向うへ突いた、男の身が浮いた下へ、片袖を敷かせる、と、まくれた白い腕を、膝に縋つて、お柳は吻と呼吸。

男はぢつとして動かず、二人ともしばらく黙然。(同) 男の名がともに「金」であることは偶然であつたかもしれない。しかし、これら二つの「再会」の場面は寄り添う男女を記しており、その構図がよく似ている。芥川の撰取は、『三尺角』『三尺角拾遺』の連作からのものではなかつたかと考えられるのである。

『三尺角拾遺』は、はじめ『木精』として発表され、改題を経て、春陽堂『鏡花集』に収録されている。以下に、春陽堂『鏡花集』の収録作品を挙げておく。

『鏡花集第一巻』(明治四十三年一月)

予備兵、義血侠血、凱旋祭、ねむり看守、辰巳巷談、うしろ髪、三尺角、三尺角拾遺、湖のほとり、絵日傘、葛飾砂子、水鶏の里、湯女の魂、伊勢之巻、袖屏風、二世の契

『鏡花集第二巻』(明治四十三年五月)

注文帖、わか紫、紅雪録、胡蝶の曲、瓔珞品、高野聖、誓之巻、清心庵

『鏡花集第三巻』(明治四十三年八月)

縁結び、海異記、女仙前記、きぬく川、七本桜、雌蝶、春昼、春昼後刻、尼ヶ紅、沼夫人、七草

『鏡花集第四卷』（大正二年一月）

取舵、錦帯記、照葉狂言、五の君、黒百合、吉原新話、楊柳歌

『鏡花集第五卷』（大正七年九月）

『鏡花双紙』（大正五年一月）改題本

月下園、三枚続、さゝ蟹、鐘声夜半録、波かしら、親子そば三人客、柳小島、風流蝶花形、草迷宮、笈摺草紙、髭題目、菓草取、千鳥川、鶴の姿

芥川は『妙な話』（大正十年一月）という作品の中で、作中人物に明らかに「鏡花」に言及させている。このことから、この時期に芥川は春陽堂『鏡花集』に接し、鏡花作品から摂取を試みていたのではないかと推測される。まずは、『妙な話』の該当箇所を確認する。

● しかし彼は一月ばかりすると、あいつの赤帽を怖がるのも、大分下火になって来た。「姉さん。何とか云ふ鏡花の小説に、猫のやうな顔をした赤帽の出るのがあつたでせう。私が妙な目に遭つたのは、あれを読んでゐたせゐかも知れないわね。」——千枝子はその頃僕の妻に、そんな事も笑つて云つたさうだ。所が三月の幾日だかには、もう一度赤帽に脅かされた。それ以来夫が帰つて来るまで、千枝子はどんな用があつても、決して停車場へは行つた事がない。君が朝鮮へ立つ時にも、あいつが見送りに来なかつたのは、やはり赤帽が怖かつたのださうだ。

『妙な話』

この『妙な話』に登場する「鏡花の小説」とは、鏡花『紅雪録』（明治三十七年三月）、『続紅雪録』（明治三十七年四月）のことを指している。この二篇は、春陽堂『鏡花集』第二巻に、『紅雪録』一編としてまとめられて収録された。

次に挙げるのは、鏡花『紅雪録』の中で、『妙な話』の千枝子に「猫のやうな顔をした」と言われていた「赤帽」に関わる箇所である。

● 時に彼の少き旅客は、低し、といふよりも、寧ろそれよりは発し得ないやうな沈んだ調子で、「君、君、」と二声呼んだ。赤帽は旧の如く腕を拱いて壁に描かれた姿で突立つて、稍頭を下げて居た、離れたものには居睡をすると見えよう。但突出でた廂の下に、黄色を帯びた一双眼の目は、怪しき星の光を帯びて、円らかに開いて居たので、重い口ながら速に應じた。『紅雪録』七

● 揺ぐわ、揺ぐわ、傍の窓掛、凸に片目を出して、ぎろりと様子を伺ふ者あり。

赤帽がぬツと出た。

渠は酔へる時よりは、なほ面赤く、茶褐色の薄髻の中に微笑を浮べて、

「旦那、殺りましたぜ、旦那。はゝはゝ、此の通りだ。」といつて、綾子が玉を伸べた項の中央、疵口を、赤帽は手に取つて、明晃たる鋭き小刀の背で叩いた。『続紅

雪録』(十五)

ここに挙げたような、赤帽の目の「光」、「ぎろりと様子を伺ふ」仕草などが、千枝子に猫のような顔つきを想像させたということであろう。この赤帽は、青年千之助を邸内に連れ込み弄ぶ夫人の話を聞かされたことから、夫人を殺害する。そして、次のように理由を説明する。

● 此の婦人は、私が兄貴の敵ですよ。

こりやね、前に兄貴の媽々だったでさ。兄貴は、商人の癖に、本人望といふで、此の阿魔久しい間、東京へやつて、豪い学者に仕立てたですよ、馬鹿野郎、蝦茶を緋の袴ほどに難有がつたで、自分で一つ学校を立てるなんのといふ口に乗つて、恐しく金子を注ぎ込んだもんでがす。何、皆浮氣に使つたのは私が知つてまさ、其のね、私さへ、一寸口説いたくらゐな奴だ。

現在弟に不義をしかける、そんなものに、何の末練を、私が証拠だ、打棄れ、と言つたけれど、へなちよこめ、其癖紫川や長者町には、向うから落ッこちる奴もあつたですが、因果だね。『続紅雪録』(十五)

つまり、兄の妻であつた夫人の不義への復讐として、赤帽は夫人を殺害したというのである。

『妙な話』の「私」は千枝子との密会の約束が果たされなかつたと漏らして、友人の妹であり出征中の軍人の妻である千枝子と、不義の關係を持つていたことを暗にほめかけて

いる。そして、友人の話から、その密会の日に出会つた赤帽を千枝子は怖れていたと知つたのである。

● 私はカツフエの外へ出ると、思はず長い息を吐いた。

それは恰度三年以前、千枝子が二度までも私と、中央停車場に落ち合ふべき密会の約を破つた上、永久に貞淑な妻でありたいと云ふ、簡単な手紙をよこした訳が、今夜始めてわかつたからであつた。……『妙な話』

千枝子が赤帽を怖れる理由の一つを、不義の妻が断罪されるという『紅雪録』内の事件が負つていたことが理解できる。密会の日に出会つた赤帽から「鏡花の小説」を想起し、怖れを抱いた千枝子が、「永久に貞淑な妻でありたい」という手紙を書くのは当然のことであつた。

ほぼ同時期に発表された『妙な話』において、芥川は鏡花の『紅雪録』を作中に取り込んでみせた。このことから、『奇怪な再会』は、『妙な話』と同様に春陽堂『鏡花集』内の鏡花作品に接近を試みたものと考えることができよう。繰り返になるが、鏡花『木精』が『三尺角拾遺』と改題されたのは、春陽堂『鏡花集』第一巻においてであつた。

二、「再会」のあり方

——『奇怪な再会』と『三尺角拾遺』

『奇怪な再会』における、鏡花『三尺角』『三尺角拾遺』

からの摂取は「再会」の場面にまで及んでいることが確認できた。しかし、その「再会」は、実は人物の構図を取り込もうとしただけでもなさそうである。ここでは、そのことをより詳細に検討する。

『奇怪な再会』には、「藪や林」が反復して登場する。

● 雨が降つても、風が吹いても、川一つ隔てた藪や林は、心細い響を立て易かつた。お蓮は酒臭い夜着の襟に、冷たい頬を埋めながら、ちつとその響に聞き入つてゐた。かうしてゐる内に彼女の眼には、何時か涙が一ぱいに漂つて来る事があつた。しかしふだんは重苦しい眠が、——それ自身悪夢のやうな眠が、間もなく彼女の心の上へ、昏々と下つて来るのだつた。……………(一)

● 雨は彼等が床へはいつてから、霰の音に変わり出した。お蓮は牧野が寝入つた後、何故か何時までも眠られなかつた。彼女の冴えた眼の底には、見た事のない牧野の妻が、いろいろな姿を浮べたりした。が、彼女は同情は勿論、憎悪も嫉妬も感じなかつた。唯その想像に伴ふのは、多少の好奇心ばかりだつた。どう云ふ夫婦喧嘩をするのかしら。——お蓮は戸の外の藪や林が、霰にざわめくのを気にしながら、真面目にそんな事も考へて見た。(二)ここにはまず、お蓮が眠れない時に、「藪や林」に意識をやりつつ、やがて「悪夢のやうな眠」につくという構図が見られる。そして、それが「滄桑の変と云ふ事もある。この東

京が森や林にでもなつたら、御遇ひになれぬ事もありますまい。(四)」という予言めいた言葉を経て、「藪」や「林」を見る夢の中で、金を思い続けるようになる。

● それは彼女がたつた一人、暗い藪だか林だかの中を歩き廻つてゐる夢だつた。彼女は細い路を辿りながら、「たうとう私の念力が届いた。東京はもう見渡す限り、人気が出来のに違ひない。」——そんな事を思ひ続けてゐた。(八)

この中に見られる「たうとう私の念力が届いた」にもまた、『三尺角拾遺』の以下の箇所と共通する部分がある。

● 「断めのつくやうに、断めさして下さいと、お願い申した、あの、お返事を、夜の目も寝ないで待つてますと、前刻下すつたのが、あれ……ね。

深川の此の木場の材木に葉が繁つたら、夫婦になつて遣るツておつしやつたのね。何うしたつて出来さうもないことが出来たのは、私の念が届いたんですよ。あなた、こんなに思ふもの、其位なことはありませんよ。」

やがて、そのような「念」は夢の中に収まりきらず、お蓮の正気を奪っていく。そして、牧野の妻滝が「いえ、御願ひと申しました所が、大した事でございませうが、——実は近々に東京中が、森になるさうでございしますから、その節はどうか牧野同様、私も御宅へ御置き下さいまし。御願ひと云

ふのはこれだけでございます。(十二) などと言った言葉を聞くのである。しかし雇婆さんによればこの牧野の妻の言葉は「悪態(十三)」であつたらしいのである。牧野の妻に対して「可哀さうにあの人は、気が少し変なんだよ。(十三)」と言うお蓮だが、このとき、むしろ狂気を疑われるのはお蓮自身であつた。

そうした狂気の延長線上に、金との「再会」を位置づけるかのような事実もあつた。

● 又或時はふと眼がさめると、彼女と一つ床の中に、あ
ない筈の男が眠つてゐた。迫つた額、長い睫毛、――す
べてが夜半のランプの光に、寸分も以前と変らなかつた。
左の眼尻に黒子があつたが、――そんな事さへ検べて見
ても、やはり確に男だつた。お蓮は不思議に思ふよりは、
嬉しさに心を躍らせながら、その儘体も消え入るやうに、
男の頸へすがりついた。しかし眼を破られた男が、うる
ささうに何か呟いた声は、意外にも牧野に違ひなかつた。
のみならずお蓮はその刹那に、實際酒臭い牧野の頸へ、
しっかりと両手をからんでゐる彼女自身を見出したのだつ
た。(十一)

お蓮と金との「再会」は、こうして牧野を金と見間違えた
ときのように、お蓮が再びそこにない金の姿を見出したもの
である可能性は否定できない。

● ふと頭を擡げたお蓮は、もう一度驚きの声を洩らした。

見ると小犬のゐた所には、横になつた支那人が一人、四
角な枕へ肘をのせながら、悠々と鴉片を燻らせてゐる！
迫つた額、長い睫毛、それから左の目尻の黒子。――す
べてが金に違ひなかつた。のみならず彼はお蓮を見ると、
やはり煙管を啣へた儘、昔の通り涼しい眼に、ちらりと
微笑を浮べたではないか？(十七)

「再会」した金の姿は、「迫つた額、長い睫毛、それから
左の目尻の黒子」と、先の引用と同じように形容されている。
しかし、ここで金が「煙管」を持つてゐることに留意し
ておきたい。この「煙管」は、牧野の「巻煙草」と対照的に
用いられた小道具だと考えられるからである。以下に挙げる
ように、牧野は「巻煙草」や「葉巻」を常用していた。

● 高座には明い吊ランプの下に、白い鉢巻をした男が、
長い抜き身を振りまはしてゐた。さうして楽屋からは朗
々と、「踏み破る千山万岳の煙」とか云ふ、詩をうたふ
声が起つてゐた。お蓮にはその剣舞は勿論、詩吟も退屈
なばかりだつた。が、牧野は巻煙草へ火をつけながら、
面白さうにそれを眺めてゐた。(七)

● 寄席がはねたのは十時だつた。二人は肩を並べながら、
しまうた家ばかり続いてゐる、人氣のない町を歩いて来
た。町の上には半輪の月が、霜の下りた家々の屋根へ、
寒い光を流してゐた。牧野はその光の中へ、時々巻煙草
の煙を吹いては、さつきの剣舞でも頭にあるのか、「鞭

声肅々夜河を渡る」なぞと、古臭い詩の句を微吟したりした。(七)

- 「そうすりや此処にゐなくとも好いから、何処か手広い家へ引つ越さうぢやないか？」

牧野はさも疲れたやうに、火鉢の前へ寝ころんだ儘、田宮が土産に持つて来たマニラの葉巻を吹かしてゐた。

(九)

- 七草の夜、牧野が妾宅へやつて来ると、お蓮は早速彼の妻が、訪ねて来たいきさつを話して聞かせた。が、牧野は案外平然と、彼女に耳を借した儘、マニラの葉巻きばかり燻らせてゐた。(十二)

こうした対照にもまた、『三尺角拾遺』の影を見ることができよう。『三尺角拾遺』には、工学士・金さんの用いてゐる「巻煙草」をお柳が投げ捨て、彼がその「巻煙草」の火の光と「煙管」の光とを見紛う場面がある。

- 男は其頸を抱かうとしたが、フト目を反らす水の面、一点の火は未だ消えないで残つて居たので。驚いて、じつと見れば、お柳が投げた巻煙草の其ではなく、霧か、霧か、朦朧とした、灰色の溜池に、色も稍濃く筏が見えて、天窓の円い小な形が一個乗つて蹲むで居たが、煙管を啣へたらうと思はれる、火の光が、ぼツちり。(「三尺角拾遺」)

「巻煙草」が「煙管」と見えたのは、幻想的な「再会」が

果たされた後のことであつた。芥川は『奇怪な再会』においても、「再会」がお蓮の誤認によるものではなく、幻想的な

「再会」が実現しているものと印象づけようと「巻煙草」と「煙管」を使い分けたと考えられる。

「再会」の場面には、さらに両作品の共通性を見出すことができる。

- それでも二時を聞いてしまふと、漸く眠気がきざして来た。——お蓮は何時か大勢の旅客と、薄暗い船室に乗り合つてゐる。円い窓から外を見ると、黒い波の重なつた向うに、月だか太陽だか判然しない、妙に赤光のする球があつた。乗合ひの連中はどうした訳か、皆影の中に坐つた儘、一人も口を開くものがない。お蓮はだんだんこの沈黙が、恐しいやうな気がし出した。その内に誰かが彼女の後へ、歩み寄つたらしいけはひがする。彼女は思はず振り向いた。すると後には別れた男が、悲しさうな微笑を浮べながら、ぢつと彼女を見下してゐる。……(二)

● 座敷の暗いのを思ひ出したお蓮は、不思議さうにあたりを見廻した。すると何時か天井からは、火をともした瑠璃燈が一つ、彼女の真上に吊下つてゐた。

「まあ、綺麗だ事。まるで昔に返つたやうだねえ。」

彼女は少時はうつとりと、燦びやかな燈火を眺めてゐた。が、やがてその光に、彼女自身の姿を見ると、悲し

さうに二三度頭を振つた。(十七)

船室に金の幻を見るとき、座敷で金の姿を見るとき、ともにお蓮は、「光」の下に居るという描かれ方をしている。そしてまた、『三尺角拾遺』においても、「再会」のとき「あかり」がさすのである。

●爾時何事とも知れず仄かにあかりがさし、池を隔てた、堤防の上の、松と松との間に、すつと立つたのが婦人の形、ト思ふと細長い手を出し、此方の岸を気だるげに指招く。『三尺角拾遺』

このように見てくれば、芥川の『奇怪な再会』は、『三尺角拾遺』の趣向を多く摂取して「再会」の場面を描き出していたと考えられる。『三尺角拾遺』の「再会」は強く思い続けた夢の現実化であり、『三尺角』でいうところの「福音」の具現化である。芥川は『奇怪な再会』において、そうした「再会」の趣向を利用している。

三. 幻想の扱い方にあらわれる差異

—芥川『魚河岸』と併せて

ここまで、『奇怪な再会』と『三尺角』『三尺角拾遺』の類似性を追ってきたが、では『奇怪な再会』の独自性はどのような点にあらわれているであろうか。両作品に描かれたのが同じように幻想的な「再会」でありながら、実はその幻想の

扱いにこそ大きな差異があると考ええる。

そこで問題となるのは、『奇怪な再会』に登場する「私」の友人の医師「K」の存在であろう。

●「それから一日か二日すると、お蓮——本名は孟葱蓮は、もうこのK脳病院の患者の一人になつてゐたんだ。何でも日清戦争中は、威海衛の或妓館とかに、客を取つてゐた女ださうだが、——何、どんな女だつた？ 待ち給へ。此処に写真があるから。」

Kが見せた古写真には、寂しい支那服の女が一人、白犬と一しよに映つてゐた。(十七)

「K」は「脳病院の患者」の言つたこととして、お蓮の「再会」の出来事処理してしまう。こうした扱いこそが、『奇怪な再会』と『三尺角』の決定的な相違なのである。『三尺角』では「小屋の材木に葉が茂つた」と「狂気の如く大声」をあげるのは、与吉であり、お柳自身ではなかった。一方で『奇怪な再会』では、それは「脳病院の患者」であるお蓮一人の体験として処理されてしまう。このことの意味は大きい。『三尺角』では、お柳の周囲の者たちも奇跡の到来を待ち望み、その実現を肯定していく。だからこそ『三尺角拾遺』の「再会」が「福音」の具現化となり得る。しかし、『奇怪な再会』においては、お蓮以外の誰も奇跡を期待してはいない。むしろ「K」によつて奇跡は否定されることになり、「再会」は同じような「福音」として機能しないのである。

「K」は話しながら、白犬と一緒に映るお蓮の写真を見せ
ている。この白犬が、金との「再会」までの過程でお蓮にと
つてどのような役割を果たしたか、そして「K」が白犬に何
を看取したか、そのことが「K」という存在を端的に表して
いるだろう。

先述したような、お蓮が船室に見る「赤光のする球」のイ
メージは、お蓮の飼う白犬の「緒」い鼻に引き継がれるもの
であると考えられよう。

● 「この犬は鼻が黒いでせう。あの犬は鼻が緒うござん
したよ。」

お蓮は牧野の酌をしながら、前に飼つてゐた犬の鼻が、
はつきりと眼の前に見えるやうな気がした。それは始終
涎に濡れた、丁度子持ちの乳房のやうに、鶯色の斑があ
る鼻づらだった。(一六)

お蓮が現在飼うのは、鼻の「緒」かった白犬に「よく似て
ゐる(一六)」白犬である。しかしお蓮にとつては、この白犬
は、金の思い出と重ねられることと相まって、夢と現実の境
界を失わせるものとして機能していく。

● 牧野は深夜ランプの光に、妙な苦笑を浮かべながら、たう
とうお蓮へ声をかけた。

「おい、其処を開けてやれよ。」

が、彼女が襖を開けると、犬は存外ゆつくりと、二人
の枕もとへはひつて来た。さうして白い影のやうに、其

処へ腹を落着けたなり、ちつと彼等を眺め出した。

お蓮は何だかその眼つきが、人のやうな気がしてなら
なかつた。(一六)

● 又或時は長火鉢の前に、お蓮が独り坐つてゐると、遠
い外の往来に、彼女の名を呼ぶ声が聞えた。それは門の
竹の葉が、ざはめく音に交りながら、たつた一度聞えた
のだった。が、その声は東京へ来ても、始終心にかかつ
てゐた男の声に違ひなかつた。お蓮は息をひそめるやう
に、ちつと注意深い耳を澄ませた。その時又往来に、今
度は前よりも近々と、なつかしい男の声が聞えた。と思
ふと何時の間にか、それは風に吹き散らされる犬の声に
變つてゐた。……………(十一)

この白犬が過去を思い出させるのは、お蓮にとつても牧野
にとつても同じことである。しかし、お蓮はその犬の「眼つ
き」や「声」に、金の存在を感じとつていたのである。

そのうち、この白犬が死ぬという事件が起こる。その白犬
の死骸を眺めるお蓮は、犬の鼻の色の変化に気付く。

● お蓮は其処へ坐つたなり、茫然と犬の屍骸を眺めた。

それから頼い眼を挙げて、寒い鏡の面を眺めた。鏡には
畳に仆れた犬が、彼女と一しよに映つてゐた。その犬の
影をちつと見ると、お蓮は目まひでも起つたやうに、突
然両手に顔を掩つた。さうしてかすかな叫び声を洩らし
た。

鏡の中の犬の屍骸は、何時か黒かるべき鼻の先が、赭い色に變つてゐたのだつた。(十)

金と別れる前に飼つていた白犬と、現在お蓮の元にいる白犬の違いは、鼻の色が「赭」ではなく「黒」という点であつた。それが、お蓮が白犬に金を感じとり、その先に犬の鼻が過去の思い出と同じように「赭」いものとなつていったのである。白犬の「赭」い鼻は、船室の「赤光のする球」から連続して、思ひ出が現出する「再会」の奇跡の兆しとも見える。

一方で、「K」は「僕は犬が死んだのさへ、病氣かどうかと疑つてゐる(十七)」と言う。婆さんによれば白犬の死は「食中りか何か(十)」が原因ということであつた。だが、白犬の死を聞いた牧野が「厄介払ひをしたと云ふやうに、にやにや笑つて(十)」いたとも言うのである。「K」の言葉によつて、この婆さんの説明が暗示した、牧野の犯行は明らかになろうとしている。そして「K」は白犬の毒殺を金の死に重ねる。つまり田宮が言う「暗打ち(十四)」が暗示していた、牧野の手による金の殺害ということである。「K」は、こうしてお蓮にとつて過酷な事実を露わにしていふ。

『奇怪な再会』は、「この小説内に描かれる怪奇な文脈は、すべて合理的即物的に解釈可能」^⑤、あるいは「幻想の中で「東京が森になる」ことで、または彼女の内部で「金さん」と犬が完全に一体化することで、彼女の狂気は完成する」^⑥などと分析される。こうした解釈は、白犬の事件がそうであ

るように、「K」の存在と言葉に導かれて可能になるのである。

芥川は、『魚河岸』(大正十一年八月)の中でも作中人物に「鏡花の小説」について言及させている。

● するとその最中に、中折帽をかぶつた客が一人、ぬつと暖簾をくぐつて來た。客は外套の毛皮の襟に肥つた頬を埋めながら、見ると云ふよりは睨むやうに、狭い店の中へ眼をやつた。それから一言の挨拶もせず、如丹と若い衆との間の席へ、大きい体を割りこませた。保吉はライスカレーを掬ひながら、嫌な奴だなど思つてゐた。これが泉鏡花の小説だと、任侠欣ぶべき芸者か何かに、退治られる奴だと思つてゐた。しかし又現代の日本橋は、到底鏡花の小説のやうに、動きつこはないとも思つてゐた。『魚河岸』

● 鏡花の小説は死んではゐない。少くとも東京の魚河岸には、未にあの通りの事件も起るのである。

しかし洋食屋の外へ出たとき、保吉の心は沈んでゐた。(同)

ここには、「鏡花の小説」に懷古的な憧れを抱くが、同時に現代と「鏡花の小説」の間に距離も感じてしまう人物が描かれてゐる。

これを、『奇怪な再会』において鏡花『三尺角』『三尺角拾遺』を撰取しながら、「再会」を奇跡としてではなくお蓮の

狂気の結果であると解釈を促す人物も配した芥川の心境、と捉えるのは短絡的すぎるだろう。しかし、二つの作品にあった差異を考えることはできそうである。鏡花の『三尺角』『三尺角拾遺』が、思い続けることによって夢が現実になる奇跡であったとすれば、芥川の『奇怪な再会』は、思い続けても夢は心の内にしかないものであったのである。

四、懷古調の共通、およびその差異

——『大東京繁盛記』における芥川と鏡花

次に挙げたのは、『奇怪な再会』の冒頭である。

● お蓮が本所の横網に囲はれたのは、明治二十八年の初冬だった。

妾宅は御藏橋の川に臨んだ、極手狭な平家だった。唯庭先から川向うを見ると、今は両国停車場になつてゐる御竹倉一帯の藪や林が、時雨勝な空を遮つてゐたから、比較的町中らしくない、閑静な眺めには乏しくなかった。

(一)

お蓮が囲われたという「本所」について、芥川は後に『大東京繁盛記』（『東京日日新聞』／昭和二年三月十五日〜十月三十日）中の『本所両国』（五月六日〜二十二日）に以下のように記することになる。「総武鉄道」の「両国停車場」がつけられ「工業地」になつてしまつた場所にも、かつては「七

不思議」を感じる「お竹倉」があった。

● 僕は生れてから二十歳頃までずっと本所に住んでゐた者である。明治二三十年代の本所は今日のやうな工業地ではない。江戸二百年の文明に疲れた生活上の落伍者が比較的多勢住んでゐた町である。従つて何処を歩いて見ても、日本橋や京橋のやうに大商店の並んだ往来などはなかつた。（大溝）

● 総武鉄道の工事のはじまつたのはまだ僕の小学時代だったであらう。その以前の「お竹倉」は夜は「本所の七不思議」を思ひ出さずにはゐられない程ものさびしかつたのに違ひない。夜は？——いや、昼間さへ僕は「お竹倉」の中を歩きながら、「おいてけ堀」や「片葉の蘆」はどこかこのあたりにあるものと信じない訳には行かなかつた。現に夜学に通う途中「お竹倉」の向うにばかばやしを聞き、てつきりあれば「狸ばやし」に違ひないと思つたことを覚えてゐる。（お竹倉）

『奇怪な再会』は、そのような明治二十年代の「本所」を回顧しながら語り始められる。妾宅から見える「御竹倉一帯の藪や林」は、辻占の予言を経て、その光景の実現への予兆となる。この冒頭部分は「七不思議」の起こる場所、失われゆく江戸の風景への遡行として機能している。

そして、鏡花『三尺角』もまた、近代とともに切り捨てられてゆくものに焦点をあててゐる。

● けれども、滅びるといつて、敢て此の部落が無くなる
といふ意味ではない、衰へるといふ意味ではない、人と
家とは栄えるので、進歩するので、繁昌するので、やが
て其電柱は真直になり、鋼線は張を持ち、橋がペンキ塗
になつて、黒塀が煉瓦に換ると、蛙、船蟲、そんなもの
は、不残石灰で殺されよう。即ち人と家とは、栄えるの
で、恸る景色の儚がなくならうとする、其の末路を示し
て、滅亡の兆を表はすので、詮ずるに、蛇は進んで衣を
脱ぎ、蟬は榮えて殻を棄てる、人と家とが、皆他の光榮
あり、便利あり、利益ある方面に向つて脱出した跡には、
此地のかゝる儚が、空蟬になり脱殻になつて了ふのであ
る。『三尺角』(三)

参考までに挙げれば、芥川が『本所両国』を記した『大東
京繁盛記』には、鏡花も『深川浅景』(七月十七日〜八月七
日)を記している。

● 大川の方へその出つ端に、お湯屋の煙突が見えませう。
何ういたして、あれが、霧もやの深い夜は、人をおびえ
させたセメント会社の大煙突だから驚きますな。中州と
箱崎を向うに見て、隅田川も漫々渺渺たる処だから、あ
なた驚いてはいけません。『深川浅景』

● それにしても、荒れてゐる。野にさらしたものの如く、
杭が穴、桁が骨に成つた橋が多い。わづかに左右を残し
て、真中の渡りの深く崩れ込んだのもある。通るのに危

なつかしいから、また踏み迷つた体になつて、一処は泥
亀の如くに穴を伝ひ、或処では、

「手を曳いてたべ……幽霊どの。」

「あら、怨めしや。」

どろくどろと、二人で渡つた。(同)

その中で鏡花が描き出した風景の中には「セメント会社
の大煙突」のそびえ立つ姿がある。近代化されゆく東京と、そ
れ以前の風景に対する懷古を基調とする点で両者は共通して
いる。一方で、鏡花が近代の風景の中にも容易に「幽霊」と
いう不思議を語り遊ぶことに較べれば、芥川の不思議な風景
は既に過去のものであり、もう一度見出すのが容易ではな
く、なつてゐるという差異も読み取れる。

おわりに

芥川は『奇怪な再会』の創作過程で、やはり鏡花『三尺角』
『三尺角拾遺』の撰取を試みたものと思われる。但し、その
撰取の中心は、東京が森になる予言という点よりも、むしろ
「再会」の構図と奇跡の描き方にあつたと考えられる。とこ
ろが、芥川は『奇怪な再会』を、「私」が脳病院の医師であ
る友人「K」から聞いた話とした。そのことにより、「再会」
はお蓮の狂気と関わるものとなり、『奇怪な再会』は全体と
しては『三尺角』『三尺角拾遺』とは異質な独自性を持つて

いるのである。

ここには、『魚河岸』の作中人物や『大東京繁盛記』に見られるような芥川の、『鏡花』との間にあるズレが関係していると思われる。「鏡花の小説」は憧れの対象ではあっても、どこか前時代的であり、現在にはそぐわないものを感じてしまう。そして、鏡花のように近代の風景の中に不思議を想起して楽しむことはないのである。『奇怪な再会』は、そのような芥川の『鏡花』への微妙な距離感を示す作品であつたとも言えるのだらう。

注

- (1) 吉田精一「芥川龍之介I」(『吉田精一著作集』第一巻／桜楓社／昭和五十四年十一月)。
- (2) 村松貞孝「与吉が、瀕死のお柳のもとに恋する男からとどいた手紙に「材木に枝葉がさかえたら夫婦になる」とあつたのに対して、「大変だ、小屋の材木に葉が茂った」と叫んで、福音を伝える。吉田精一氏は、この一条に触れて、「芥川の『奇怪な再会』(大正一〇)は、鷗外の『鼠坂』と鏡花の『三尺角』からの暗示が認められると断言してよいかも知れない」(昭和一七『芥川龍之介』三省堂刊)と述べている。「(『鏡花小説・戯曲改題』／『泉鏡花辞典』／有精堂／昭和五十七年三月)や、吉田昌志「のち大正期になって、谷崎潤一郎が『葛飾砂子』の映画化を

試み(大正九年十二月)、芥川龍之介が『三尺角』の影響下に『奇怪な再会』(同十年一月—二月)を書くなど、東京根生いの兩人がともに金沢の人鏡花の描いた深川に共鳴するところがあったのも、ひとえに一連の「深川もの」が良くその風土の特性を捉えていたからであろう。」(『解説『琵琶伝』『照葉狂言』『辰巳巷談』／『泉鏡花集』・新日本古典文学大系／岩波書店／平成十四年三月)など。

(3) 井上諭一「『奇怪な再会』論——怪奇の行方——」(『弘学大語文』第二十号／弘前学院大学国語国文学会／平成六年十二月)。

(4) 岡田豊「芥川龍之介『奇怪な再会』への一視点——〈物語〉を物語る「私」の物語として——」(『駒沢国文』第三十八号／駒沢大学国文学会／平成十三年二月)。

(5) (3)に同じ。

(6) 一柳廣孝「芥川龍之介における〈夢〉・覚書——『奇怪な再会』まで——」(『名古屋経済大学開学一〇周年記念論集』／平成二年三月)。

【付記】引用は『芥川龍之介全集』(岩波書店／平成七年十一月)、『鏡花全集』(岩波書店／昭和四十八年十一月)に拠った。全ての引用について、漢字は適宜通行の字体に改め、ルビは省略した。引用文の傍線は全て論者の付したものである。

(にしおものぶ／本学大学院博士後期課程)